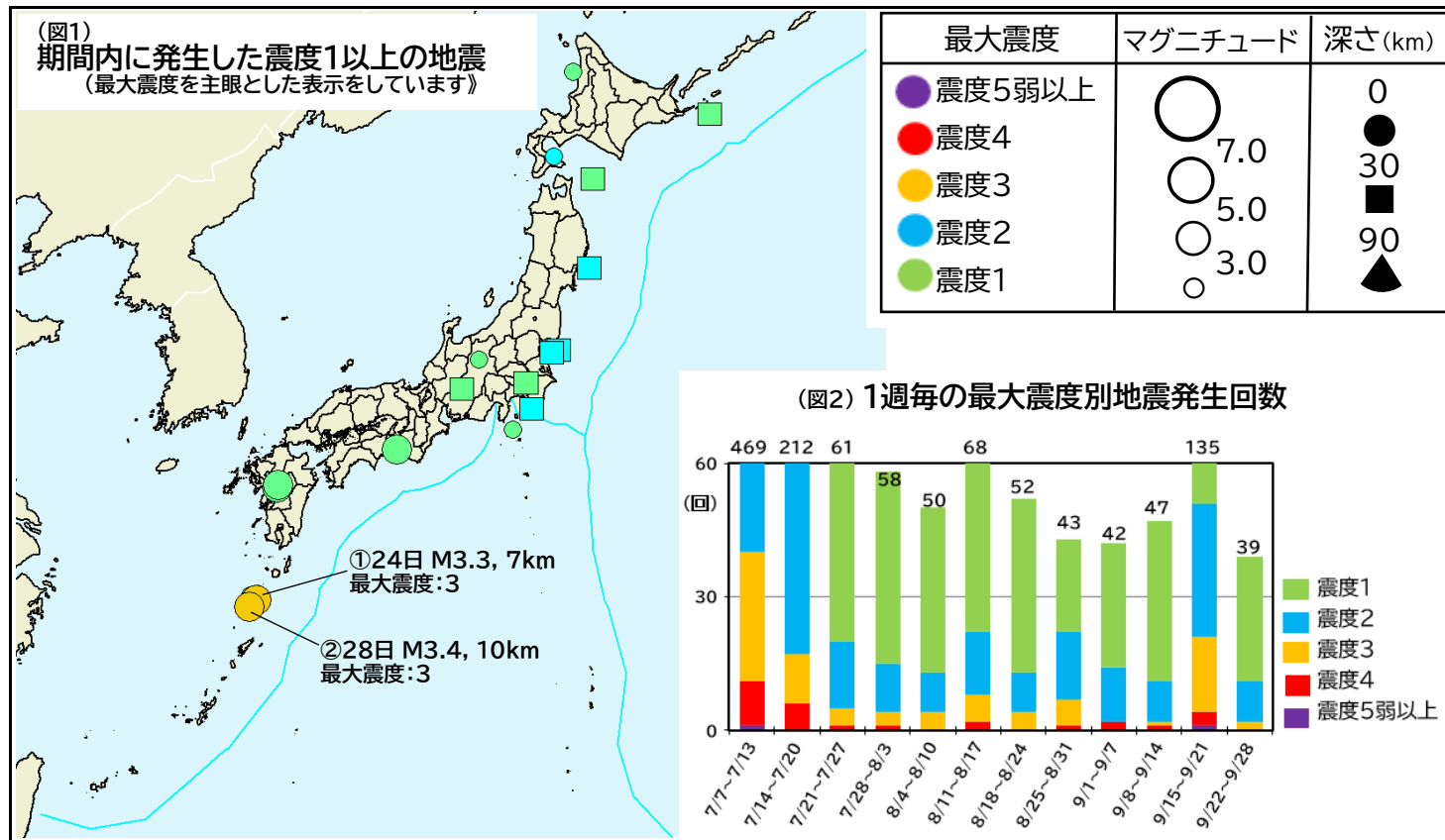


この期間の最大震度は3

本資料は上記期間に国内で発生した震度1以上の地震についてまとめたもの (出典:気象庁震度データベース/地震情報)



主な地震の発生状況 (図1,図2参照)

■ この期間、震度1以上の地震が39回発生。最大震度は3 ■

- ①9月24日18時53分にトカラ列島近海で発生した地震(M3.3、深さ7km)により、鹿児島県十島村悪石島で震度3を観測。
- ②9月28日21時35分にトカラ列島近海で発生した地震(M3.4、深さ10km:速報値)により、鹿児島県十島村諏訪之瀬島で震度3、悪石島で震度1を観測。この期間、諏訪之瀬島付近や悪石島付近で震度1以上を観測した地震は16回。

トピックス

■ 南海トラフ地震の発生確率 見直し ▶これまでの「80%程度」を「60~90%程度以上」に変更 ■

- ・政府の地震調査委員会は26日、南海トラフ地震の発生確率の算出方法を見直しました。
- ・算出方法を見直した結果、今年1月1日時点で今後30年以内に発生する確率を「80%程度」としていた値を、「60~90%程度以上」に変更しました。また、新たに「20~50%」とする値も併せて発表され、2つの値が存在することになりました。
- ・地震発生確率の計算手法には、南海トラフ独自の計算手法と、その他の地域の地震で使っている計算手法の2つがあります。
- ・南海トラフ独自の計算手法は「時間予測モデル」(図3)と呼ばれており、古文書に残されている江戸時代に発生した南海トラフの地震の際に、高知県室戸市の室津港で見られた地盤隆起を示した記録から推定した地殻変動のデータに基づいた計算モデルです。
- ・この手法により今後30年以内に発生する確率を公表してきましたが、この古文書に残されている記録の正確性をめぐって以前から議論があり、不確かさを指摘する論文も発表されました。
- ・このため、古文書の記録を精査した上で、誤差を踏まえて計算した結果、発生確率を「60~90%程度以上」と変更したものです。
- ・併せて、ほかの海溝沿いで発生する地震と同一土俵で比較できるように、ほかの海溝沿いの発生確率を求める手法と同様の計算手法で計算したところ「20%から50%」になったということです。
- ・この発生確率の変更は、計算手法の改訂であって、**地下の動きに異常な変化が生じたために確率が変わったものではありません。**
- ・地震調査委員会は、数字に変更があっても、次の地震の発生が切迫していることに変わりはなく、国、地方公共団体、住民等は、地震発生に対する防災対策や日頃からの備えに引き続き努めていくことが必要としています。
- ・「南海トラフ地震は、次の地震に向かって、既に折り返し地点を過ぎている」と、ということでしょう。

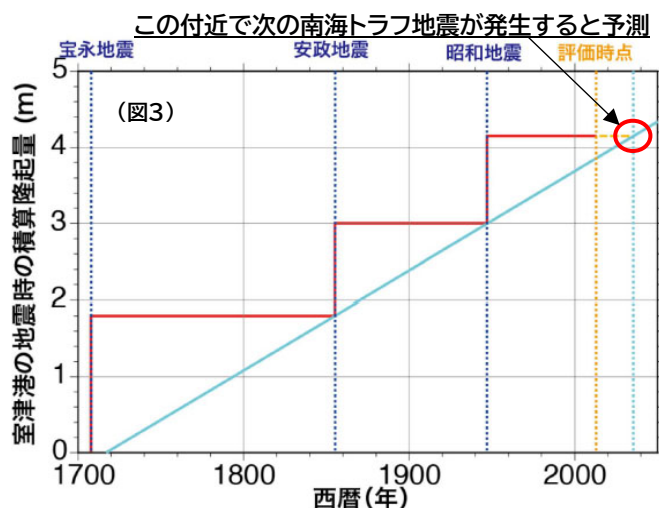


図3:時間予測モデルの概念図
地震調査委員会資料に加筆